

## 語源俗解考

工藤 力男

### 一 はじめに

前稿、工藤(1986)において、わたしは、日本語語彙論の術語「位相」の成立事情を探り、その定義と用法に関する若干の問題について考察した。それは、日本語学・国語学の多くの概論書に見られる記述への拭い難い違和感に発し、学術用語は厳密かつ正確に使用すべし、文学研究者もほしいままの使用を慎むべしという、極く当然な主張を述べたに過ぎない。かかる概論書には、さらに強い疑念を覚える記述もある。「語源俗解」がそれである。

ヨーロッパの言語学から借用したこの術語は「位相」よりも歴史が古い。そこで、まず日本の学界における記述の実態を一瞥し、欧米の言語学界における記述を確認し、日本における受容と記述の足跡をたどる。そうした作業によって、前稿と同じように、日本における理解の淵源と経過を明らかにし、その原因を考え、記述の修正

を提案したい。

標題の「語源俗解」はもとより、ドイツ語“Volksetymologie”、英語の“popular etymology”などに該当する術語として便宜的に用いたもの。引用以外はこれによるが、「民衆語源」「俗語源」など、他の呼称を排除するものではない。いずれによつても誤解を招きかねない概念であることも示したいと思う。なお、引用には「源」ならぬ「原」の字も見られるが、誤植ではない。

## 二 日本語学概論書の記述と問題点

わたしが概論書の記述に疑念をいだいたのは四半世紀前、大学で初めて国語学概論を講じたときのことである。そこで、その書を初め、手もとにある数点の概論書の記述を掲げることから始めよう。ただ、最近の概論書の著者や編者はこの概念あるいは現象に関心が薄いようで、項目に掲げない書も多い。なお、本稿の目的は概論書の著者を批判することにはないので、書名はA—Eの符号で示して、キリスト暦による刊行年だけを括弧内に洋数字で表記し、他の事項は文献注記に回すこと、前稿と同じである。

A 従来の語源探求の結果が、多く俗間語源説といはれる類に属してゐるのは、語源探求の予備行為ともいふべき原義の発見に不注意であるに本づいてゐるものが多い。(1931年)

手近に見ることのできた概論書のうち、この術語を説明するものとして古い方に属する。ずいぶん漠然とした記述で、「従来の語源探求の結果」が何を指すかよく分らない。「俗間語源説といはれる」も同じだが、以下の他

書にも見える、地名起源説話や江戸時代に盛行した語源解釈などを指すのだろう。ならば、第五節に引く東條操『国語学新講・新改修版』（1963年）の同類となる。

B 日本では、古くから語義についての関心が深く、特になぜこのものは、こうよばれるのかということに興味が集めた。たとえば「ねこ（猫）」とどうしてよばれるのかについて、「ねずみをこのむ」からとか、「ねるをこのむ」からといわれたのである。こういうこじつけの解釈は、「民衆語源」などといわれるが、こんなことが江戸時代には真剣に考えられたのである。（1973年）

Aの記述を具体化したようなこの記述に対する強い違和感がわたしの最初の経験であった。この本文に対する脚注では、貝原益軒の『日本釈名』の当該条を示して次のように補足する。

民衆語源は英語でfolkymologyという。地名伝説で、「吾妻はや」といったので「東」というとするのも、「一所懸命」を「一生懸命」とかえたのも、民衆語源によつてである。

のちに詳しく論ずるが、ここに見える、「ねこ」の語源説明、古事記に見える地名「あづま」の起源説話、「一所懸命」という語形が「一生懸命」に変わったこと、この三つは果たして言語に対する同じ態度と言えるだろうか。

C 民間語源や誤った類推、誤読などによつても、新しい語形が生まれることもある。「四角い」「一生懸命」

「病コウモウ（膏盲）に入る」などである。（1980年）

民間語源、誤った類推、誤読を並列し、続く挙例がいずれに該当するか明らかでない。あえて区別するに及ばずとの判断かと思われ、それも一つの見識で、A、Bとは異なる説明である。

D 「ねこ」の「ね」は鳴き声からきているとか「寝」からきているとか言うのも語源である。ただし、その

科学的な証明は難しい。また、一般に行われている非科学的な語源解釈のことを「語源俗解」または「民間語源」と呼ぶ。「あ(足)」に「かがり(敷)」がついてできたものから変化した「あかぎれ」を「垢切れ」と解釈するのがその一例である。(1985年)

これは昨年度の講義に用いたものである。「ねこ」が「寝」からきているという説明は俗解に当たるとは明らかでない。後半の記述で、「あかぎれ」という語について、切れて血の滲む手をまのあたりにした人は、「赤切れ」と解釈しやすいだろう。げんに北国の秋田市で育ったわたしには、「あかぎれ」は「赤切れ」以外の何ものでもなかった。この筆者は「あかぎれ」を「足敷り」と解釈しえたのだろうか。記述の順序が少し納得できない。

E 語形変化は、純粹に言語内の要因によるものと認められる。ただし、誤った語源意識(民間語源)による語形の変化や、他の語との類推・意味の混同による語形の変化などは、心理的な要因とも関連している。

(1993年)

この記述は、語形変化に限定して明快である。

以上のように、この術語の説明のさまざまであることが分かる。これをまとめると、まず、中世から現代まで少なからぬ人々の著作、例えば松永貞徳『和句解』に見える、稲はいのちの根、ねずみをこのむから猫、うろこと尾があるから魚のたぐいを典型とする。これを《分解型》と呼ぶことにしよう。語を拍に分解はするが、合理的な思考によるのではなく、いわゆる《延約通略》を駆使して説明するものである。次に、古代の地名や語の起源説話に見えるもので、言語の歴史性に留意せず、現にある語を当時の言語で説明したもの。ただし、すでに当事者の関与しえない伝承の世界のことゆえ、これは《伝承型》と呼ぶことにしよう。最後は、「一生懸命」や「あ

かぎれ」の説明などに見える、語形変化の経緯がたどれるもので、これは《変化型》と呼ぶでしょう。すると、Aは《分解型》、Cは説明が簡単過ぎるが《変化型》としていいだろう。Eは最も明確な《変化型》である。Bはこれら三つをすべて含んでいる。Dは若干不明瞭な点があるが、《分解型》《変化型》としておこう。文言から推測するに、恐らくBの著者はそれを自覚していないだろう。

術語としての「語源俗解」は本来、《分解型》《伝承型》《変化型》のいずれなのか、これらの二つあるいは三つを含むのか、それともこれらとは異なる定義が必要なのか。

### 三 本邦語学辞典の記述と問題点

概論書の外に視野を広げて、いま日本で行われている語学辞典の記述を見よう。手初めに『国語学研究事典』（1977年）から「民間語源説」の項の初め三分の一ほどを引く。

学問的に承認されない、多く民間に見られる素朴な語源説。（中略）語源学は、少なくとも近親語との比較研究や語構成の見地から考えられなければならない。語形については音韻史を考慮し、文字との関係に留意しなければならない。民間語源説は、このような学問的配慮・手続きを抜きに、共時的観点から単語の元の意味や語形を考えるものであり、その考えに基づいて語がつくられることもある。その説明は一通り理に適っているところがある。語源といわれるものに対しては、語形が変わったり、同音異義語にすり換えられたりしていることが多い。ちよつと着るから「チョッキ」。実は、jaque（オランダ・フランス語）が語源。土曜

日を「半ドン」と言つたのは、昼にドン（明治の時代、東京で昼に午砲が鳴った）が鳴ると半日で帰れるからと  
 いった類。実は半分のドンタク（condtg オランダ語の日曜日）の意。（以下略 遠藤好英執筆）

掲出部冒頭に言う学問的な承認と呼応するように、この項は「どこまでが学問的に承認される語源説で、どこからが民間語源説になるかは決め難い場合もある。」で終わっている。その識別が不可能ならばこの定義自体に無理があるのではないか。「語源学」は近親語との比較研究以外にありえないのだから、続く一文の記述は正当である。ただ、それなら、近親語の証明されない日本語において語源を論ずることは無意味になるだろう。しかし、筆者はそこまで踏み込まず、共時論的な説明を「民間語源説」と称している。これは、前節で見た、『日本釈名』や古代の地名起源説話の語源解を指すものと思われる。これすなわち、前節の分解型、伝承型である。チョッキや半ドンの説明は、語形が変わることを条件とするので、いちおう前節の変化型に該当すると言えそうである。つまり多義的な説明なのである。

「チョッキ」に関する右の説をはつきりと否定することは不可能だが、極めて訝しいと思う。『日本国語大辞典』は慶応三年以降の資料から「袖無し、胴衣、中単」を挙げ、新刊の『漢字百科大事典』によると、明治初期には「胴着、背心、胴服」、明治半ばには「胴衣」が行われたようだ。通行の国語辞典は外来語の訛りとするたちばで、俗解説にはくみしていない。わたしはチョッキの原語を知らなかったが、ちよつと着るからチョッキだと解釈した日本人がいたとも、その解釈でこの言葉が普及したとも考え難い。仮にこれを語源俗解と認めるとしても、先の分類に比べると、変化型には違いないが、近代、外来語借用の際に生じた変化なので、これを先の三つと區別して『借用型』と呼ぶことにする。

「半ドン」の説明は、わたしにはさらに受け入れ難い。東京の多くの人が果たして半日で帰れる午砲と解釈したのだろうか。もはや確認する術はないが、ドンタクは明治の極く初期から用いられたばかりでなく、休日、日曜日、仕事の無い日などの意味で全国に広く分布するからである。そこから「半休日」の意味の「半ドン」を生み出すことは極めて自然である。したがって、土曜日に東京の一角で午砲が鳴ったくらいで、半日休暇の午砲という解釈が全国に広まったというのはいかにも非現実的である。「半ドン」が広まったのち、原語の意味が忘れられてから、午砲が鳴るという事実に合わせて、誰かがまことしやかに言い出したのではなからうか。仮にそう解釈した人があったとしても、「半ドン」の語形には何の変化もなかったのである。幕末から明治にかけて輸入された外来語の日本化について、この手の俗説が多いのではなからうか。

『国語学研究事典』に先行する『国語学辞典』(1955年)の「語源俗解」の項を見よう。

非科学的な語源説で、(中略)民間語源などとも言う。ちよつと着るからチョッキ、ずぼんとはくからズボンの類。その実チョッキはEjack(袖無し・肉衣)、ズボンはJippon(下袴)である。また地名起源伝説を生じたり、民間信仰を作り出したりすることもある。(中略)学者でも正しい語源のつもりで俗解に陥っていることがある。契沖が『田珠庵雜記』で「ねこ」を「ねずみの子をまつ」意の「ねこま」の略としたのや、貝原益軒が『日本釈名』で「ねずみをこのむ」だと解したごとき、また現代の名著『言海』の「おもしろ」は日の神が天の岩戸を出られた時、天晴れ、衆の顔みな白きを喜び、「あはれ、あなおもしろ、あなさやけ」と言ったことから起つたと説くのも、この種の素朴さである。(以下略 金田一京助執筆)

先に『国語学研究事典』の説明について指摘した、学問的な承認、学者語源と民衆語源の判別の無意味さが、こ

ここには明確に露呈し、契沖も益軒も大槻文彦も学者とは言えないことになる。また、原語が蘭仏と英とでずれているが、挙例のチョッキが一致するのも偶然ではあるまい。この起源は果たしてほんとうか。物と言葉が日本にはいった経過を正確にたどることは不可能であろう。執筆した両氏はそれを知ることができたのだろうか。ズボンの表記をさきの辞典と事典で検すると、『西洋道中膝栗毛』に「ズボン」が登場し、ほかに「ヅボン、窄袴、洋袴、細袴、股下、下袴、袴服、穿袴」などが見える。金田一の定義は先の借用型と分解型に該当するが、この項の終りで「一所懸命▽一生懸命、出発▽<sup>しゅつたつ</sup>出立、上臈▽お嬢さん」のたぐいを挙げている。これは変化型だから金田一の説明も多義的なのである。

新たに接触した言語から借用されるとき、何らかの変形を受けるのは当然で、それも語ごとにさまざまである。英語からの借用で言うと、ground▽グラウンド、bulldog▽ブルドック、jelly▽ゼリーなどは、彼我の音韻構造のずれによる自然な変形で、その過程も透明である。しかし、明治時代に行われた借用語の漢字表記、club▽倶楽部、catalogue▽<sup>カタログ</sup>型録、concrete▽<sup>コンクリート</sup>混泥土などに素朴な言語意識を読み取ることは危険である。ここに籠められているのは、かなり高度の洒落であり、遊びなので、これらを語源俗解による変形と見得る根拠は極めて乏しい。かくて、借用語においては二つのばあいと考えられる。一つは、借用時に語源俗解がはたいて原形から著しく離れたもの、いま一つは、ひとたび日本語にはいったのちに、意図的な用字や語呂合わせなどによる変形を被ったものである。表記に着目すると、その経過を跡付けることができなければ、軽々に「語源俗解」と称すべきではあるまい。

『国語学大辞典』（1988年）は、大項目主義の方針から「語源」の項で説明しており、その項の終りに、「正しい



「語源」との対比で次のように記す。

これらの条件に明らかに背馳し、客観性を持たない恣意的解釈と認められるものを、民衆語源とか語源俗解とか称する。古く『万葉集』の用字法や、『風土記』の地名説話以来、近くは、「時計」や「型録」などの語にいたるまで、その例は夥しい。いわゆる宛字として固定化されることによって、既に人々の語源意識に根を下ろしてしまっているものも多い。(以下略 阪倉篤義執筆)

ここでは、「一往その語の正しい語源」と限定して慎重に記述しているが、伝承型の記述に続けて、変化型・借用型も挙げており、『国語学研究事典』『国語学辞典』と基本的に変わらない。ここでいう『万葉集』の用字法が具体的には何を指すのか分らない。同じ辞典の「あて字」の項には、「その語を分析的に表記する場合、往々に語源俗解に従うようなこともあり、また戯書とでも称すべき表記を行うこともある。」とある。執筆者が違っているので一つには括れないが、その戯書の例「山上復有山(出づ)」は確かに当て字であるが、漢詩に発する「字謎」という高度の技巧であつて、これを俗解としては失考を犯すことになるだろう。

すでに見たように、多くの日本人研究者は古代の地名起源説話を語源俗解と言うが、具体的にそれを挙げることはほとんどない。阪倉氏も同様だが、それはほんとうに語源の名に値するだろうか。実例を一つだけ挙げよう『播磨国風土記』神前郡の条、大汝命と我慢比べをした少比古尼命が耐えかねて糞をまると、小竹が弾き上げて衣服に着いたので、そこを「波自賀<sup>はじか</sup>の村」と名付けたという話。古代人たちは真にこれを信じていたか。わたしは、この話の背後に古代人の哄笑を感じこそすれ、探求心の営みを読み取ることはできない。現代、観光地で聞かされる、弘法大師の杖突き石や弁慶の草履の話と変わらなと思う。

地名の説明が事実を伝えることはある。例えば、同じ風土記の飾磨郡漢部の里は、讃岐国の漢人等が来て住んだので、漢部という部の名で呼んだという文化史的な由来であり、菅生の里は、菅生すがふの里は、菅原があつたので普通名詞の菅生をここに適用した自然誌的な由来を伝える。これらはある言葉を、その土地に当てた経緯を語るに過ぎず、語源を語るものではない。とまれ、これらは泰西の言語学の“Volksetymologie”とは無縁の事柄ではなかったか。

『日本書紀』神武天皇前紀の戊午年二月に、天皇が難波碕の辺りで速い潮流に会つたので、浪速国と名付けたと記し、難波なみはというのは訛りだという。これを語源俗解とする人がいるのだが、浪が速いから浪速なみはやと言うのがどうして俗解であろうか。川のはとりの地を川辺かはべと称するのと同じく正当であつて、これを俗と言うのはぬれぎぬであろう。ナニハと呼ばれていた土地が潮流の速い所だったので、いつの間にかナミハヤと変わったとき、そこに俗解の意識を見るのである。本末を顛倒させてはいけない。簡単に図式化すると左記のようにならうか。

I (未名) ↓(浪の速さへの着目) ↓ナミハヤ……「命名」

II ナニハ ↓(浪の速さへの着目) ↓ナミハヤ……「変化」

わたしの知る限り、古代の地名起源説話はすべてIすなわち命名であつて、IIすなわち変化の例はない。

日本語の語構成論の推進者であつた阪倉氏には阪倉 (Sakai) があり、語源俗解にも紙幅を割いている。

個々の語に対する自分なりの理解に基いて、人々はその言語生活を営んでいる。その一つの場合——その語の本来の構成からすれば明らかに誤解ではあるが、しかし、それなりに一往のこじつけ的解釈が成り立つている場合が、いわゆる民衆語源と呼ばれるものである。

そして「呼ばひ▽夜這ひ」「目だくな▽目だうな▽めんだう (面倒) な」「勝事▽笑止」などの例を挙げてこう補

足する。

いずれも、本来の語の使用が稀になって、その意味が忘れられたり語形（発音）が変化したりしたものを、  
 当代の言語意識から納得できるように、新しく解釈し直したものである。この場合は、本来の、いわば学者  
 語源とも称すべきものが客観的に判明している（とされている）から、こういう主観的解釈は、民衆語源だ  
 の語源俗解だのと貶められる。

いま傍線を付けた部分は、括弧書きを添えるなど、苦心のあとが著しい。たびたび言うが、そもそも本来の語源  
 だの学者語源だのという評価を、いったい誰が下すというのだろう。わたしは「面倒」の表記に意味が籠つてい  
 ると感じたことはない。

阪倉氏のこの記述は、同系の言語を得て、規則的な音韻対応、語構成様式の歴史に立脚して初めて語源研究は  
 成り立つのだ、という泉井久之助の揚言を受けてなされている。いわば、比較言語学の文脈においてのみ有効な  
 言説であつて、語源俗解について言及すべき場所ではなかったのだ。我々は、学者語源と民衆語源を対立させて  
 とらえる誤謬から解放されなくてはならない。厳密な系統論に立脚した語源の探求は、厳しい研鑽を経た研究者  
 しかなしえないのだから、学者語源という概念は無意味である。語源俗解は語源論とは異なる範疇に属する、と  
 すべきである。

この『国語学大辞典』には、「言語地理学」の項の「推定の手がかり」にも「民間語源」の名で見える。  
 言語地理学が地理的分布を手がかりに言語の変遷を推定するということは、言語の変遷を言語外の情報によ  
 って説明するということである。（中略）話者ひとりひとりの心理的条件も情報として集め、推定の手がかり

りとする。すなわち、語に対する好み、いいことばか否か（威光を感じるか否か）、忌詞、民間語源などである。（中略）民俗学は、名もなき常民からの聞き書に信頼を置くが、言語地理学も、民間語源（語源俗解）のような、学のない話者から聞き出す心理言語学的情報も重視する。（以下略 柴田武執筆）

語源俗解を言語変化の原理としてだけ見て明快至極である。

#### 四 欧米の言語学書の記述

第二節に書いたように、わたしがこの術語の記述に疑念をいだいたのは、大学で初めて国語学概論を講じた時のことであつた。それは、学生時代に言語学書で学んだ記述との違いを意識したからである。柴田武（1967）によると、これに初めて言及したのはドイツの E. Forstemann（1868年）だという。それが、どのように理解され、使用されてきたか、その経過を若干の欧米の言語学書の記述から探ってみたい。

ソシュール（1916）の “*etymologie populaire*” の章では、類推とほとんど区別がつかないが、類推ほど合理的でないとして、主要な型を二つとする。そして、語が形態を変えられることなく新しい解釈を受ける第一のばあいとして実例を五つ示すが、「たいていのばあいは、見覚えのあると思われる要素にばつを合わせようとして、語を奇形化する」と言う。新しい解釈を受けたら、それが形態にも反映するのが自然だから、大半が第二の型だというのは、十分に予測されることである。第一の型の少ない実例の一つ、Lasser の動詞状態体詞である *lâss* を、*légner* のそれと見て *legs* と書くが、*le-g-s* と発音する人もある、という。これは、すでに形態にも変化の生じて

いることを示す何よりの好例であろう。語の意味は絶え間なく変化していくので、そこに使用者のさまざまな意識が関与するのは当然である。それをいちいち語源だ俗解だとあげつらっているのは、際限ないことだろう。

日本語でこの型を考えてみると、例えば「雨催ひ」は、「ひ」の子音の有聲化ののち、語末の長音化によって「雨催う」となったときから意味変化は始まったに違いない。モヨウが「紋様」と結び付いた経過は明らかではないが、「雨の降りそうな状態」の意から「雨の降っている状態」へと解釈が変わると、人々は「雨模様」の表記で固定させ、さらに「空模様」の語も作り出した。これはソシユールの挙例によく似ている。

パウル(1920 第五版)は、「新しい集団の形成」の章で、「語の派生」の節に続けて、「上述の現象と区別すべきは、さらに複雑な様式の語源俗解である。この種の語源俗解は音韻形態を变じるもので、これによってある語が偶然に類似の響きによって他の語を連想させ、更にこれに同化されるのである。」と述べ、形態変化に限って明快である。

ソシユールの『講義』に少し遅れて書かれた、ヴァンドリエス(1921)は、第五章「形態変遷」でこれらの実例を多く挙げながら「類推」として扱っている。

この類を多く見るにはイエスペルセン(1922)が最適だろう。popular etymology の例としては、乳母が neuralgia「神経痛」と言うのを、new ralgia と分析して old ralgia と言った四歳の男子、たびたび耳を irrigate「洗淨」してもらっていて、たまたま鼻を洗ってもらったときに nosigate と言った七歳の男子、whirlwind「旋風」を worldwind と言うことなどを挙げている。これらはいずれもある時、子どもが実際にそう信じて用いた語形である。すなわち、そこでは語源を解釈した子どもによって、普通とは異なる語形で実現したり、新しい語形が

生まれたりしたのである。

イエスベルセンに拠るまでもなく、日本にも子どもこそ言葉の発明者だと繰り返し述べた柳田國男がいる。昨年一年間、高橋顯志氏は『月刊言語』誌に「子供の語源」と題する連載で最近の事例を多く報告した。その第一回で、言語変化の一つの契機として「民衆語源」を正當に位置づけたのが言語地理学であったことを述べ、子どもに民衆語源と同様にはたらくメカニズムを、あえて「幼児語源」と呼んでいる。最終回では、その觀察の根底に柳田國男があったと述べている。

ブルームフィールド(1935)は、この現象を「類推的变化」の章で扱い、語の単なる解釈ではなく、その結果としての語形変化に関わる概念にとらえている。それは「規則的新形成」(regularizing new-formations)——(史的研究者が見出すように)その形式のヨリ以前の構造とは一致しないところの——は時に、通俗語源(による形成)(popular etymologies)と呼ばれる。」の記述からも明瞭である。

ウルマン(1959)は「史的意味論」の章で、通俗語源には二つの局面があつて、語形に影響することも意味に影響することもある、というNyrupの説を引く。そして、この二つを分けようとするKroeschとSternを紹介し、Hatfieldは、音声的語源癖と通俗語源とを区別すべきだとして後者を形式の影響だけに限っているが、かかる分離が実際にはできないことが多いことを認めているという。ウルマンは、はっきりした境界線を引くことは、通俗語源のような現象にとつては不適切だとの見方を採っている。

ウルマン(1962)ではさらに詳しい論を展開し、「透明語と不透明語」の章で、民間語源を意味論の視点から四つに分ける。

1 意味には影響するが、語形には及ばない。

例、F. jour ouvrable 「店や役所だとかが開いている日」 $\wedge$ 労働日」

2 語形は変わるが、意味は変わらない。

例、E. bridegroom  $\wedge$  brydgunna 「花婿」

3 語形と意味の両方に影響する。

例、D. Sündflut 「ノアの洪水」  $\wedge$  sintvliut 「世界中の洪水」

4 書き言葉のみで、発音には及ばない。

例、F. legs  $\wedge$  ais 「遺産」

そして、多くは3であると言う。4には発音と一致しない綴りの体系をもつ言語という条件を付けており、その挙例はソシユールの説明の箇所でも一言したのは3に該当するが、いったい、人々の解釈つまり通俗語源によらざる意味変化というものが考えられるだろうか。意味だけ変化した1に該当する日本語として、「うつくし、おとなし、やさし」などの情意形容詞がある。これらの語幹に形態変化はないと言えるが、意味は大きく変わっている。それは、日本語社会に生きた人々の毎日の使用の結果として、微小な変化が堆積したものに違いない。

そこに人々の解釈が関与しなかったと断定することはできない。現在、「情けは人の為ならず」という諺の意味変化が進んでいることは周知の事実である。これとても形態には変化が起こっていない。かく見ると、意味変化のほとんどが俗解と言えるのではないか。発音と綴りのずれが小さい日本語で4の実例を挙げることは難しいが、

やはり近年話題になる諺「袖触れ合うも他生の縁」の意味変化も、「他生」を「多少」と解釈するものだが、これも音声としては何ら変化がなく、表記の上に初めて露わになるものである。

ウィンフレッド (1962) は、「文法体系の変化…類推変化」の章で、*F. sur-loin* を語源としながら、ラテン語 *super 'upper* から派生した *sur* が英語の複合語に多く見られないゆえに *surloin* に変わった現象を、「面白い現象」「無責任な修正を表わす新しい構成」とし、この「通俗語源においては、空想の入り込む余地の少ない類推におけるよりも、個人が言語を勝手に改ざんするとか、仲間に気に入る、気に入らないとかの要素が明らかである。」と述べて、形態変化の心理的な背景を説明している。

シェーラー (1977) は、「混合語彙」の章で、「借用された語が透明さを欠いていることへの反発として、民間語源の形態で通俗的な再造語がより頻繁に起こってきた。」と述べており、中世ラテン語に由来する [a] *sparabus* から *sparrow-brass* 「アスパラガス」が生まれた例などを挙げている。さらに、ライズイの説を引いて、民間語源は「独断による語の解釈である。それは語源的に理解されなかった借用語のみならず、有契性を失っている本来語に関しても起こる。」として、古英語 *wermod* から変化した *wormwood* 「にがよもぎ」などを挙げている。

以上、わたしの見ることできた狭い範囲ではあるが、語源俗解に関する欧米の言語学書の記述は、最近のエイチソン (1991) まで、基本的に変わることがない。つまり、言語の歴史性を無視した説明、わたしの言う分解型・伝承型を指すものは一つも見られず、語の変化について言う、わたしの変化型・借用型に限られるのである。ヨーロッパでは、方言の衝突もさることながら、異なる言語がある日突然干渉し合うという事態が多く生じた。その結果として、自らの言語や方言で解釈しようとして形態や意味を変えることがしばしば行われたように



ある。言わば言語の接触によつて起こつた現象である。日本では明治時代に多くの外来語が入ってきたが、これは構造を異にする言語であつたので、ヨーロッパにおける事情とは大いに異なる。したがつて、彼土のばあいの多くは〈接触〉と言いつるが、本邦のばあいはやはり〈借用〉と呼ぶがいいだろう。一方、日本でも著しく分化の進んだ方言の世界では、ヨーロッパにおける接触によく似た言語変化が多く起こつた。それを説明する原理が“Volksetymologie”と名付けられたのである。方言学者の使用に欧米の言語学者とのずれが殆どないのはそのためだろう。とまれ、西洋の言語学において、〈語源俗解〉という術語は、誤れる類推による形態（時には意味も）変化に限つて用いられている、と言つていいのではなからうか。

## 五 本邦における記述の系譜

第二―四節で見てきたように、日本語学界にかなり広く行われているこの術語の記述と、欧米の言語学界に行われている記述とは大きくずれているらしいことが明らかになった。泰西の言語学に発した語源俗解が、欧米では百五十年を経ても混乱することがなかったのに、日本では何ゆえに混乱したのだろうか。

この概念を日本に導入したのはガーベレンツに学んだ上田万年らしい。その上田の東京帝国大学での講義録、上田(1896-98)は、第三篇「Sprachgeschichte (言語の歴史)」の ANALOGY の節で、VI) Volksetymologie: Popular etymology を三つに別けて説明する。新村出のノートから、要所を引こう。

### 1) Resemblance of Form suggests a possible Resemblance or Likeness of signification

O. E. brydguma (man)

— groom

Deut. Beispiel [たとえ] (Gospel)

Bei-spiel...story, narrative

ネズミ……ネズミに見テラルカライフ。之モ本氣ナラバ Volksetymologie ナリ。

## 2) Resemblance of Form suggests a possible Likeness of Function

plaisir (fr) [楽しみ] ガ、英ニ入リ plaisir-sure

measure, nature

語原ガチガフニモカカハラズ、音ノ似寄 [リ] ヨリシテカクノ如キ事ヲナス。

parable, constable ヨリシテ syllable トイフ語ヲ作ル。sy. ハ syllabe ナルヲ -able ニ引ツケテシマフ。

## 3) Likeness of Form suggests a possible likeness of signification

形態の類似が意味の類似を示唆した結果としての変化という1の項に、日本語のネズミの説明を挙げることは果たして妥当だろうか。「言語変化」の原理を説明するこの節にネズミを挙げるには、齧齒類の小動物たる「鼠」が、日本語史上にネズミ以外の形で存在したことが明白でなければならない。十二支の第一の「ネ」という特殊な慣用以外、鼠は古来ネズミであつて、上田が言うような解釈で変化した形跡は皆無である。

その上田に学んだ新村出の語源俗解に関する多くの記述から、ここには二つを引いてみよう。新村 (1903) は、「日本語ノ音韻組織」の節で、「同音語又ハ類音語非常ニ多キガ為メニ」として、

又一方ニハ語源俗解ヲシテ容易ナラシム。同音語ノ連想、極メテ強ク、容易ナリ。故ニ、形ノ上ノ類似ヨリシテ、既ニ知レル語ニテ似タ音ノ語ノ意味ヲ以テ解釈スルノ傾向甚ダ多カリ。ソノ結果、言語ニ由テ神話、俗説ヲ産ムコト多カリ。語源ヲ俗解スル作用ハ、意識的、半意識的、又ハ無意識的イヅレニテモヨケレド、神話、伝説ノ起ルヤ、コノ無、又ハ半意識的ナル場合ニ多キガ如シ。

<sup>ムスビ</sup>産靈神 ↓ 結ブノ神  
火止ル ↓ 人生

penikken (山岳ノ蟠リ) ↓ 弁慶崎

カクノ如ク、名ニヨリテ附会スルコト非常ニ多シ。

と述べている。神話、伝説には無意識または半意識的なばあいが多いとして挙げた例は、それぞれ、ムスヒから転じたムスビを連用形名詞とみなして終止形ムスブを造語し、火トマルを異分析して人生マルとし、アイヌ語地名を日本語に合わせて変形したものである。いずれも典型的な語源俗解の例とわたしは解する。

新村 (1934) では、「金巾」<sup>かなきん</sup>「更紗」<sup>さらさ</sup>「甲斐絹」<sup>かいきぬ</sup>を例に引いて、「言葉が割合新しい場合は本道の語源か、民衆語源か、分るのであるが、文字の無い場合には、其れが分らない。昨今段々進みつゝある方言の比較研究によつて、語源の解つて来る事は多々あるが」と、比較言語学の領域での語源研究について述べながら、「真の語源として、学者が沢山の方言と比較したり、又近隣の民族の同系統の語を比較したりして云ふ所の、其の学問的の語源説と、民衆語源とが、こんがらかつて分らなくなる事がある。」と述べているのは紛らわしい。比較言語学の文脈で論ずべき語源説と民衆語源が混同するというのは、すでに述べてきたように杞憂である。ポルトガル語 *saraca* に当てた「更紗」などは意図的な表記であつて、ソシユールの所で見た「*lego*」とは事情が異なる。

柴田武(1967)は、この問題を正面から論じたものである。そこでは、この術語が「日本で特別な目で受け取られている」として、次の三点を挙げて疑念を表明している。

1 民衆語原はまちがったものだという考え。例えば「学者でも正しい語源解のつもりで俗解に陥っていることがある。」(『国語学辞典』)

2 民衆語原はとりあげるに足りない、つまらないものという考え。例えば「江戸における語源または本義の研究を見ると寛文の松永貞徳の『和句解』が最初のものであるが、これは猫は鼠を好むの略、鼠は寝澄む義という程度のいわゆる民間語源説にすぎない。」(東條操『国語学新講・新改修版』)

3 民衆語原は危険なものだという考え。例えば「この種の不規則な語を、民衆語原や類推で説明してしまうことはもつと危険である。」(『ドーザ・フランス言語地理学』松原秀治・横山邦子訳書)

3の記述は、系統論に属すべき語原探索の過程に、民衆語原や類推による解釈を紛れ込ませることを危険だと言っているのであって、民衆語原そのものを危険だと言っているのではない、念のため。

氏は、「民衆語原こそ、なにかを生み出す、生きた語原であって、それに対する『学者語原』は、その限りであって、さらに生み出すことのない、『死んだ語原だ』と述べる。また、学者語原を、過去の文献から変化したもの、現代の標準語からくずれたものと説明しうる語原と見る一方、民衆語原は、文献や書きことばとは無関係に、いま自分が使っている話しことばに加える、一種の合理化または意味づけである、と述べる。右の説明のうち、民衆語原は「何かを生み出す語原だ」というのは、評価が肯定的過ぎはしないだろうか。民衆の中から偶然に語が「生まれた」のであって、意識して「生み出そう」としたのではないからである。また、「よく考え

てみれば、学者語原はいくつかある民衆語原のうちから選び出した一つの語原にすぎないと見ることが出来る。学者も民衆のひとりであるから、彼の考える語原も民衆語原の一つである。」という結論はうべないがたい。語源俗解を説明する文脈で学者と民衆を対比させるべきでないことはすでに述べたとおりである。

本邦の言語学者の記述の最後に亀井孝(1908)を引こう。細部については異論もあるが、学ぶべきは、比較言語学の文脈での記述「語源とは本質的に語の歴史である」、「民衆語源は無意識のうちのいとなみのものと、狭くこれを限るべきである」に尽きるであろう。新村(1903)にもあったように、この「無意識」こそが鍵なのだ。したがって、当て字の多くはその成立の現場に立ち会わないかぎり、意識的か否か容易に判断し得ないが、亀井氏の挙げる「大禍時V逢う魔が時」は文語による魔語の再生で、俗解とは言えまい。山田健三(1902)の挙げる「学文V学問」も文字の意識的な改変と思われるので、俗解ではないだろう。

以上、日本の言語学書の記述に混乱の存したことを示した。語源の「俗解」と「研究」は似て非なる営みであるにもかかわらず、かくも混乱した原因は何か。最初に邦訳した人は上田万年かと思うが、その元はまず原語に胚胎していた。言うまでもなく、「語源」の原語 D. Etymologie が -logie を含むために、「語源」のほかに「語源学」にも用いられたからである。しかし、かの地では生じなかつた混乱が日本で生じた原因は何か。

その鍵は、かの地の言語と日本語との違いにある、とわたしは考える。ヨーロッパの諸処で行われてきた言語の音韻構造の特徴を一括するわけにはいくまいが、概して日本語より複雑だ、とは言えよう。それに対して、中世以後の日本語は、一子音と一母音との単純な組み合わせを基本とするモーラ言語で、しかも拍の数は百二十に満たない。そこに、特に訓練を受けた人ならずとも、簡単にネズミをネ・ズ・ミと三つの拍に分けて把えること

ができ、拍ごとに意味を有するという音義説が生まれ、「寝ずに見る」などの語源説明ならぬこじつけの行われる基盤があつたのである。英語の鼠は「*mouse*」が一音節で、これを「*maʊs*」と音素に分けて把えることはそうたやすくはあるまい。日本語はモーラ数が少ないので、新村出も言うように、同音語が多いことも、またこれにかかわっているのだろう。

## 六 おわりに

さて、チョッキとズボンである。

第三節で見たように、金田一京助は『国語学辞典』で「ちよつと着るからチョッキ、ずぼんとはくからズボン」と語源俗解を説明したが、その着想は金田一（1939）にあつた。

語原とはこの文化史的・民族的起原のことであつて、これを討究するのが即ち語原論である。（中略）此は、田舎の爺さんの話にも、寄せの高座の落語の中でも、やゝもすればすぐ始まるものである。『ちよつと着るからチョッキでございます。ずぼんと穿くからズボンでございます』の類である。かくして、語原は実に、言語に関する吾々の反省の第一歩であり、この意味に於て、それは言語学的知識の入門であるともいへるのである。

果たしてこれが言語学的知識への入門と言えるだろうか。金田一（1932）ではもっと具体的で、「円遊であつたか『なぜ奥様を山のかみと申すかといふに、それはおくやまけふこえて……だから、おくはやまの上だから……』」

といふのを聞いたこともある。」と書き出し、「かかる語原説こそ、所謂民衆語<sup>フォークエタモロジ</sup>原（また民俗語原或は俗解語原）といふもので」と述べている。それが『国語学辞典』の記述へと続き、田舎の爺さんの茶飲み話や咄家の出任せを、国語学会が編集した辞典で「語源俗解」の例としたのである。この調子で、そつと穿くからソックス、ぱつと穿くからパンツと言つても、言語学的知識の発端ということになる。しかし、右に挙げられたのは、語源談義にすぎず、術語の「語源俗解」とは無縁である。ただし、上の論文の続く記述はおおむね通時論としての「類推」なので、金田一も多義的に理解していたことが明らかである。

言語学において、語源に及ぶ分野は、語源論と語源俗解の二つに限定していい。「語源論」は比較言語学の領域でなすべき研究であるが、日本語と同系の言語が見付かっていない現状では、語源の研究は語構成論と称すべきだ、とわたしは考える。例えば、日と火の語源論争は、ヒの特殊仮名遣いに着眼すれば甲類・乙類と別語だが、さらに遡れば同一語源に至らないという保証はない。系統の不明な日本語で語源を論ずることは不毛なのだから、日と火の論は、文献時代に限れば語構成論で十分なのである。

一方の「語源俗解」は、無意識のうちに語に起こった特殊な類推変化で、形態を主とするが意味に及ぶこともある、と記述すべきである。その俗解、すなわち合理化の過程は、新しく成立したものについては、話者の意識調査で跡付けうることもあるが、その不可能なものについては、推測に終わることになる。これがわたしの結論である。

結局、語源俗解は、日本に導入した上田万年に始まる解釈がのちの言語学者・日本語学者に引き継がれて『国語学辞典』に結実し、長く影響を及ぼした、とまとめることができよう。現在の日本語学書の記述を見ると、そ

の解釈の系譜は主に語彙論の記述に受け継がれており、方言研究者はおおむねそれとは無縁である。吉田則夫(1988)は近年では珍しく詳細な記述であるが、「A・術語の解説」では、「俗・民」の文字にこだわって史的語源・学者語源と対立させる旧來の解釈を継承する点が惜しまれる。

それにしても嘆かわしいのは、言語研究をなりわいとしながら、術語をかくも不正確に用いて疑いをいだかない人の多いことである。そして、上田万年に始まったらしい解釈を日本語学界に滲透させたのが、「位相」と同じく『国語学辞典』であつたというわたしの推測が当たっていたら、それを鵜呑みにして疑わない人が多いことも憂うべきである。權威あるべき辞典が疑問点を含むまま世に行われていることになるのだ。「師の説になづまざること」と言つた故人の言を反芻しなくてはならない。

日本語学徒の末席をけがしてはいるが、外国の言語学には疎いわたしにこの問題は荷が重く、失考の多からざらむことを祈るばかりである。その重い荷を引きずりながら、多くの紙数を費やしてしまった。けだし、權威者の一言を無名の者が訂するには一万言でも足りないだろう。

### (文 献)

- A 安藤正次著『国語学通考』第六章「語義の研究」 六文館
- B 福島邦道著『国語学要論』21「語義」 笠間書院
- C 宇野義方編『国語学』第四章「語彙」 学術図書出版社
- D 古田東朔他著『新国語概説』第四章「語彙」 くろしお出版
- E 工藤浩他著『日本語要説』第四章「古代語の語彙・語彙史」 ひつじ書房



- イエスベルセン (1922) *Otto Jespersen, Language, its Nature, Development and Origin* (市河三喜・神保格訳『言語 その本質・発達及び起源』1972年 岩波書店)
- ヴァンドリエス (1921) *Joseph Vendryes, Language, Introduction Linguistique a l'histoire* (藤岡勝二訳『ヴァンドリエス言語学概論——言語研究と歴史——』1938年 刀江書院)
- ウインフレッド (1962) *Lehmann P. Winfred, Historical Linguistics — An Introduction* (松浪有訳『歴史言語学序説』1967年 研究社)
- ウルマン (1959) *Stephen Ullmann, Principles of Semantics* (山口秀夫訳『意味論』1964年 紀伊國屋書店)
- (1962) *Semantics: An Introduction to the Science of Meaning* (池上嘉彦訳『言語と意味』1977年 大修館書店)
- エイチソン (1991) *Jean Aitchison, Language Change: progress or decay?* (若月剛訳『言語変化』1994年 リーベル出版)
- シェーラー (1977) *Manfred Scheler, Der englische Wortschatz* (大泉昭夫訳『英語語彙の歴史と構造』1986年 南雲堂)
- ンシニール (1916) *Ferdinand de Saussure, Cour de Linguistique Générale* (小林英夫訳『一般言語学講義』1972年 岩波書店)
- パウ (1920) *Hermann Paul, Prinzipien der Sprachgeschichte* (福本喜之助訳『言語史原理』1965年 講談社)
- ブルームフィールド (1935) *Leonard Bloomfield, Language* (日野資純・三宅鴻訳『言語』1965年 大修館書店)
- 上田万年 (1896-98) 『言語学』 (1975年 教育出版株式会社)
- 亀井 孝 (1984) 『語源』 (『日本古典文学大辞典』第二卷 岩波書店)
- 金田一京助 (1939) 『語源の本質』 (『文学』第七卷九号 岩波書店)
- (1942) 『語原論』 (『文学』第十卷十号 岩波書店)
- 工藤力男 (1978) 『性急な思想——日本語語源学について——』 (『金沢大学国語国文』六号)
- (1996) 『語彙論の術語〈位相〉考』 (『成城文藝』百五十五号)
- 阪倉篤義 (1978) 『日本語の語源』 (『岩波講座日本語』12)
- 柴田 武 (1967) 『民衆語原について』 (『国語学』第六十九集)
- 新村 出 (1903) 『国語学講義要綱』 (『新村出国語学概説』1974年 教育出版株式会社)

(1934)「日本辞書の現実と理想」(『国語学講習録』引用は『新村出全集』第一卷による)

吉田則夫(1988)「民衆語源の意義」(『日本語百科大事典』大修館書店)

山田健三(1992)「学文と学問」(『名古屋大学国語国文学』七十一号)

# 〔付記〕

語源俗解について、趣旨こそ本稿に近いとは言え、工藤(1978)で拙い撫での記述をしたことがある。その後、山田健三(1992)をめぐって私信を交した。山田氏は広範な調査に基づいて、語形変化したものに限るべしとする私見に反論した(1993.3.23)。いずれ詳しく調べたいと思いつながら三年が経過して、ようやく山田氏への回答を書くことができた。再考の機会を与え、かついくつかの文献を教示してくれた山田氏に感謝する。(1996.10.26)

# 〔追記〕

本文にはあえて引かなかったが、非日本語学系の『ドイツ語学辞典』(1994年 紀伊國屋書店)、OEDなどの英語辞典、欧米の百科事典の記述も言語学書と同様である。この中には、"INTERNATIONAL ENCYCLOPEDIA OF LINGUISTICS" (1992年 Oxford University Press) から、*Folk etymology* の項目を引くおぼ。"The 'correct' source of an expression is lost sight of, and speakers substitute something that seems to make more sense: *wheelbarrow* becomes *wheelbarrel*, *haphazard* becomes *half-hazard*, and *lachadistical* becomes *lachadistical*; for a child, a *typewriter* becomes a *typewriter*."

なお、尊敬する田中克彦氏の新刊『名前と人間』(岩波新書)は、語源俗解についてかなりの紙幅を割いている。そこには、本稿に引いた辞典類の記述と基本的に変わらないたちばでの記述が見える。のみならず、『国語学辞典』の金田一京助の説明を「古典的解説」として肯定的に述べている。世界の言語学に通じた田中氏の著作と本稿とは、とても勝負にならないはずなのだが、本書を読んでも私見を変える必要を認めなかった。(再校のおり、余白に)